

【I】論文

幕末期におけるオランダ原書の翻訳活動

—日本近代化と「米百俵」の主人公・小林虎三郎の教育的軌跡（X）—

信州大学 坂本保富

はじめに

江戸時代には、早くから医学や本草学、あるいは天文学や暦学などの諸分野で、オランダ語を媒介とした西洋知識の受容と普及が進み、西洋科学に関する膨大な知識や技術が蓄積されていた⁽¹⁾。そのような西洋異文化の受容基盤の上に、さらなる西洋近代の科学技術の摂取が急速に加速する契機となったのは、隣国の清朝中国に勃発したアヘン戦争（1840-1842）であった。政治や経済、学問や教育などの諸事万般に亘って、古代以来、日本という国家民族のめざすべき理想型であり、いわば宗主国であった東洋の大国—清朝中国が、植民地獲得に邁進する大英帝国に、いとも簡単に屈服し蹂躪されてしまった。アヘン戦争の顛末は、如何に対岸の火事とはいえ、中国とは一衣帯水の日本にとって驚天動地の歴史的な大事件であった。これを境に、長い鎖国政策の下で惰眠を貪っていた幕府諸藩は、対外的な危機意識に目覚め、国家民族の防衛安全という国防的な観点から、軍事科学を中心とする西洋近代科学の摂取に乗り出すこととなった。

さらに、この流れに拍車をかけたのが、ペリー率いる米国艦隊の浦賀来航（1853）であった。アヘン戦争後、予測されたこととはいえ、未曾有の巨艦の浦賀来航は、幕府大名はもちろん、日本人を震撼させに足る歴史的な大事件となった。以来、幕末期の日本においては、幕府をはじめとする全国の諸藩が、国防という軍事的動機から急速にオランダ語を媒介とする西洋近代の科学技術文明を競って摂取するようになり、その結果、全国的な規模で洋学の学習者が急増するという前代未聞の教育現象が惹起されたのである⁽²⁾。

美談「米百俵」の主人公である越後長岡藩の小林虎三郎（1827-1877）もまた、ペリー来航当時の江戸に遊学し、佐久間象山（1811-1864）の私塾に学び、儒学と共にオランダ語を媒介とした洋学教育を受けていた門人のひとりであった。彼は、「東洋道德・西洋芸術」思想を教育方針とし洋儒兼学を旨とする象山の私塾で、儒学という伝統的な学問的基礎の上に、西洋日新の近代科学を学んでいたのである。

象山は、すでにペリー来航前から江戸に私塾を開き、東西両洋の学問を兼修統一した「東洋道德・西洋芸術」思想の教育的な展開に傾注していた。彼は、偏狭な尊皇攘夷の思想や行動が、如何に非現実的で時代錯誤であるかを力説し、西洋日新の科学文明の摂取こそが、国防の急務であることを門人たちに力説し、西洋日新の科学技術文明の摂取という進取究明こそが、国防の急務であることを説諭していた。特に彼は、欧米列強のアジア進攻による国家存亡のときに、学者とは何か、学問とは何か、と現実的な存在理由を厳しく問いただした。門人たちにも、幕末日本が必要とする学問とは何かを、極めて具体的な分野をあげて、次のように説いている。

今の儒者（学者）は果して何^{なに}為^する者ぞや。本朝の神聖の造国（建国）の道と、堯舜三代（夏・殷・周）帝王の治と兼ねて明かにして、黙してこれを識^{しる}すか。礼楽刑政（礼節・音楽・刑罰・善政）、典章（規則）制度より、以て兵法・師律（軍律）・械器（科学利器）の利に至るまで、講論して皆その要を得たるか。土境の形勢、海陸道路の險夷（險阻と平坦）、外蕃（外国）の情状、防戍（防衛）の利害、城堡（城壁）・堵堞（防壘）・控援（統率）の略、推算・重力・幾何・詳証（数学）の術、並べ究めてこれを悉^{つく}すか。吾れ未だ之を知らざるなり。然らば則ち今の所謂^{いわれる}儒者は果して何^する者ぞや。⁽³⁾

象山の「東洋道德・西洋芸術」思想を内実とする進取究明の教育を受けた虎三郎は、幕末期に西洋近代の軍事科学（西洋兵学や西洋砲術）の摂取という国防的な契機から、幾冊ものオランダ原書を翻訳していたのである。この事実は、従来の洋学史研究や「米百俵」研究において、全く知られてはいなかった。彼が、幕末維新期に翻訳したオランダ原書は、その後も日の目を見ることはなかった。そのほとんどが、本邦初公開という先駆的な作品で、現在の洋学研究史上においても非常に重要な歴史的意味を有する作品であるといつてよい。

(二) オランダ語の修得と洋学の研究

(1) 江戸の象山塾における洋学の修得

ペリー艦隊の浦賀来航という未曾有の大事件が勃発した嘉永六年（1853）の六月、虎三郎は、数えで二十六歳を迎える青年学徒であった。前年に越後長岡藩から江戸への公費遊学を許され、「東洋道徳・西洋芸術」思想を標榜する佐久間象山の私塾で、洋儒兼学に励む真摯な学究の徒であった。ペリー艦隊の浦賀来航という大事件に遭遇したとき、虎三郎は、横浜開港を説く恩師象山の憂国の漢詩に感応して⁽⁴⁾、己の胸中を吐露した次のような漢詩を詠んでいる⁽⁵⁾。

癸丑の六月、^{メリケン}の使節^{ペリー}彼理、兵艦四艘を率て、浦賀港に來り、
其の大統領の書を致して去る。象山先生詩あり、其の韻に次し奉る

忠憤鬱屈涙空流	^{ちゆうふんうつくつ} 忠憤鬱屈して 涙空しく流る
正是點夷侵海秋	正に是れ ^{かつい} 點夷 海を侵す ^{とき} 秋
講武十年足以用	講武十年 以て用ふるに足る
折衝千里豈無人	千里に折衝する 豈人無からんや
草茅未見興奇傑	^{そうぼう} 草茅未だ見ず 奇傑の興るを
廊廟何縁建遠猷	^{ろうびよう} 廊廟何に縁りてか ^{えんゆう} 遠猷を建てん
生在神州同受沢	生れて神州に在り 同じく ^{たく} 沢を受く
如今孰深不負憂	如今孰か ^{じよこんたれ} 深憂を負はざる

【意訳】

^{みずのとうし}癸丑（嘉永六年）の六月、アメリカ合衆国の使節ペリーが、兵艦四艘を率て、浦賀港に來り、大統領の書状を幕府に渡して退去した。この時に象山先生は漢詩を詠まれた。先生の詩に呼応して、私は次のような漢詩を詠んだ。

忠義の心から込み上げてくる憤りは、鬱屈して涙が空しく流れる

野蛮なアメリカ人が日本の海を侵して来航してきた秋に
武を講じて十年になるが、はたして用ふるに足りるであろうか
押し寄せるアメリカとの折衝に当たれる人が、いないのではないか
在野にも、いまだ優れた人物が奮起するするのを見ることはない
一体、幕府は、何によって外交戦略を建てようというのか
神州日本に生まれ、恩沢を受けて生きている身として
今、どうして深い憂いを抱かないでいられようか

ペリーが来航した当時の日本では、いまだ異国異人の排撃を叫ぶ狭隘な鎖国攘夷の排他論が大勢を占めていた。だが、すでにアヘン戦争を契機として開国進取に転じていた象山は、黒船来航のときには、いち早く攘夷の否なることを説き、進んで開国和親を主張した。しかも、開港すべきは幕府の主張する江戸から遠く離れた伊豆下田ではなく、将軍家お膝元の江戸に隣接する武州横浜であるべきだ、と主張したのである。象山こそは横浜開港の先駆者であった。象山は、門人たちに対しても横浜開港の実現を期すべく、各自の藩主への上書を促して、次のように説いていた。

今、已むを得ずして、敵人に地を仮（貸）さんには、宜しく他日の計を為して、海陸に兵を進むるを得るの処を扱ふべし。竊に横浜の地勢を覽るに、甚だ之に邇し。則ち人人の胆を管め薪に座するの念は、自ら已む能はず。警衛守禦の方も亦自ら敵ならざるを得ず。又、親しく彼の長ずる所を覩て、以て速に我の智巧を進むべし。これ、その利多しと為す所以なり。

もし下田に退かば、則ち人心必ず弛み、守衛必ず懈らん。而して虜舶（外国船）は迅速にして、以て繫縻（警備）し難し。横浜に在ると、下田に在ると、其の江戸の腹心の患を為すことは、則ち間髪を以てすること能はず。故に吾謂へらく、横浜を以て之に仮（貸）すの愈れりとなすに如かざるなり。是れ、天下の大計なり。君（望月主人、松代藩家老、象山と深い親交）、士卒を総べて茲に在り。以て黙すべからず。上書して公（松代藩主の真田幸教）に献策あらんことを乞ひて可なりと。望月曰く、然り。然も吾が上書するは、子（象山）が上言するに如かずと。乃ち余に命じて江戸に還らしめ、之を公（松代藩主）に告げしむ。沮む者ありて果さず。公余に許して、自ら之を為さしむ。是に於て竊に建白する所あり。

又、門人長岡の小林虎をして、その主侯に上書して、大計を開陳せしめ、又、之をして阿部閣老（老中首座の阿部正弘）の親幸する所を見て、為にその利害を論じ、時に因りて規諫^{きかん}することを得て挽回^{ぼんかい}する所あらんことを欲す。並に行はれず。小林生は此を以て主侯の譴^{せめ}を得て、遂に辞して国に帰れり。⁽⁶⁾

ペリー艦隊が浦賀に来航したとき、虎三郎の主君である長岡藩第十代藩主の牧野忠雅（1799-1858）は、海防担当の幕府老中という重職にあり、老中首座の阿部正弘（福山藩主、1819-1857）を補佐して日米和親条約の締結に苦心していた。虎三郎は、米艦が来航した翌年の安政元年（1854）一月、この藩主と老中阿部に対して、師説を奉じて横浜開港を上書するに及んだ。しかし、この無謀とも思える彼の非常な行動は、書生の分際で天下の御政道に物申したとの罪で処罰され、同年十二月、郷里長岡に帰藩の上、蟄居謹慎を命じられるに至ったのである。

（2）長岡謹慎中における洋学の研究

虎三郎は、「甲寅（安政元年、1854）の春、余、罪を獲て帰り、閉居して書を読む」と自ら記すごとく、郷里の越後長岡に帰った後は、自宅を「求志洞」と称して蟄居謹慎の生活に入った。江戸での学問的大成への夢破れた彼は、以後、襲い来る不安と孤独を掻き消すかのごとくに、オランダ原書の翻訳や原稿の執筆という学究生活に没頭していく。

だが、挫けそうになる謹慎時代の彼の胸中には、常に敬慕してやまない恩師象山の姿が彷彿として甦るのであった。象山を偲んで自らを叱咤激励する漢詩を、彼は幾篇も詠んでいる。その内の一編「象山先生を懐^{おも}ひ奉る」を次に紹介する⁽⁷⁾。

先生今泰斗	先生今泰斗
妙契夙出群	妙契夙 ^{みょうけいはる} （遙）かに群を出づ
心包宇宙理	心は宇宙の理を包み
眼破東西文	眼は東西の文を破る
信中千里水	信中千里の水
越北百層雲	越北百層の雲

何日一筇枝 いづ 何れの日か一筇枝 いっきょうし (一本の杖)
玄論得再聞 玄論再び聞くを得ん

[意識]

我が師象山先生は、今、天下で最も敬仰される偉大な学者である
時代に適う希有の学者である点で、先生は群を抜いた存在である
先生の心は、宇宙の真理を包み
その眼は東西の書物を読破している
先生の住む信州を流れる千里の水
我が住む越後長岡にたなびく幾重もの雲
いずれの日にか、一つに結ばれて一本の杖となるであろう
先生の深遠なる御高説を、再び聞くことが出来るであろうか

蟄居時代の虎三郎は、処女論文「興学私議」(安政六年)をはじめとする詩文の執筆活動に励み、オランダ原書の翻訳活動に没頭するなど、恩師象山の説く「東洋道徳・西洋芸術」という思想世界の学問的探究をめざして、ひたすら東西両洋の学問研鑽に精励した。

特に「西洋芸術」、すなわち洋学の研究に関しては余念がなかった。彼は、江戸の象山塾時代に恩師から訳読すべき貴重なオランダ原書を幾冊も贈られ、また自らも重要なオランダ文献を探し求めて購入し、あるいは借り受けて書写していたのである。幸か不幸か、謹慎中の彼には、原書を読むには十分な時間があった。それ故に彼は、江戸から持ち帰ったオランダ原書の解読を進め、西洋新知識の獲得に挑んでいった。次の漢詩「読洋書」は、洋学の研鑽に励む虎三郎の直向きな向学心を見事に表現している。

洋儒窮物理	洋儒物理を窮め
輓近滋精明	<small>ばんきんますます</small> 輓近滋々精明なり
剖析入微眇	<small>ほうせきびびょう</small> 剖析微眇に入り
万象無遁情	<small>とんじょう</small> 万象遁情無し
創意製人血	創意人血を製し
全然若天成	全然天成の若し

洋人取磷酸鉄礪砂揮発華鶏子白、食塩四品而混合之、加以瓦爾華尼電気、経十二少時則化而為血、与天成之物無以異也。

洋人磷酸鉄、礪砂揮発華、鶏子白食、食塩の四品を取て之を混合し、加ふる瓦爾華尼電気を以てし、十二少時を経れば、則ち化して血と為る。天成の物以て異なる無きなり。

神会乃至斯	神会乃ち斯に至る
造物豈無驚	造物豈驚く無からんや
昧者卻娼嫉	昧者は卻（却）て娼嫉し
謗議謾縦横	謗議謾りに縦横す
何人執箴石	何人か箴石を執りて
痛下破心盲	痛下して心盲を破せん ⁽⁸⁾

【意識】

西洋の科学者は物質の真理を窮め、近年、益々精緻になってきている。物質の分析は微妙精緻に至り、万物の本質が明らかになってきた。人間の科学的な創意が人血を造れるまでになり、全く天然の物と変わりはないほどである。

西洋人は、磷酸鉄、礪砂揮発華（塩化アンモンの昇華物）、鶏子白食、食塩の四品を混合して、特に瓦爾華尼電気（Galvani, 十八世紀中頃のイタリアの生理学者、筆者注）の場合などは、十二時間を経れば則ち化合して人工の血液となる。本物の人血と何ら変わらない。

科学の神秘はここまできている。人間の創意工夫とは驚くべきものであ。この恩恵を受ける者は、本質を知らない故に、却ってこれを嫉み、悪口中傷がみだりに広まっていく。一体、誰が、箴石（病気を治す石針）を以て痛みを与え、誤った考えを打ち破ることができるのか。

彼は、江戸の象山塾時代に、オランダ語の原書を解読するに十分な語学力を修得していたのである。それ故、長岡に謹慎中の彼は、いまだ日本には紹介されていない幾冊ものオランダ原書を読破し、特に有益と思われる原書については、これを抄訳して冊子にまとめ、

関係者に配布していた。次に、彼の翻訳活動の具体的な成果の一端をみていくこととする。

(三) オランダ原書の翻訳活動

(1) 海防書「^{ちゅうかいしせつ}籌海試説」の抄訳（安政二年）

本書は、オランダ原書の兵学書である。原著者は、オランダの砲将「^{アングル}諳厄児」という軍人で、その彼が、中国でアヘン戦争が勃発する前年（1839）に著した海防書である。このオランダ語の原書を、虎三郎は、江戸遊学中の象山塾時代に書写して所蔵していた。謹慎処分を受けて郷里長岡に帰省した後、彼は、本書を訳読して感動し、その抄訳草稿に「^{しゅしゃアングルしちゅうかいしせつ}手写諳厄児氏籌海試説の後に書す⁽⁹⁾」という一文を付した。安政二年（1855）五月のことであった。

一体、二十代半ばの虎三郎は、何故に本書に注目し、書写までして私蔵し、これを訳読したのか。それは、前述した後序「^{アングル}手写諳厄児氏籌海試説の後に書す」に詳しい。嘉永四年（1851）に、江戸の象山塾に入門した虎三郎は、漢学と洋学の兼学を教育方針とする恩師象山から「東洋道徳・西洋芸術」の学問を学び、とりわけ洋学を媒介に西洋兵学や西洋砲術を中心とする西洋新知識の教授を受けた。

その折りに、恩師象山から、海国日本の防衛上、如何に海防に関する学問が重要であるかを教えられた。それ故、特に海防学に優れた西洋オランダの原書については、進んで訳読して研究すべきことを諭されていたのである。彼は、その象山から本書を貸与され、これを書写して所蔵した、というわけである。その間の事情を、彼は次のように述べている。

曩^{さき}には象山先生掲^こげて焉^{これ}を示して曰く、本邦は四面皆海。而して東西の諸蕃、舟楫^{しゅうしゅう}（舟と舵）の術、日に以て滋^{ますます}精しく、其の衝突剽^{ひょうりやく}掠（脅して掠めとる）の虞^{おそれ}あること、何ぞ^{ただ}昔に^{オランダ}荷蘭のみならん。則ち此の書の若^{ごと}き、凡そ心を辺事に留むる者、一通を取りて以て之を座右に置かざるべからずと。虎拝して之を受け、写して蔵せり。⁽¹⁰⁾

恩師象山の勧めで同書を書写した虎三郎は、遠く江戸を離れた越後長岡での謹慎中に、改めて本書を訳読したのである。西洋日新の兵学書を繙いたときの驚きを交えて、同書の概要と読後感を、彼は、次のように述べている。

今、之を読み、其の論ずる所を觀るに、砲台の築造、火器の主用、軍須（軍需）の儲蓄（貯蓄）、点放（点火）の機宜より、以て夫の水兵の応接掎角（前後相応じて敵に当たる）の法に及ぶまで、率ね皆本邦人、思慮未だ嘗て至らざる所なり。

始めは則ち愕然として驚き、茫然として疑ひ、殆ど企及すべからざる者の若し。徐ろにして之を思へば、則ち渙然として釈（解）け、沛然として疏（通）る。乃ち信（真）に其の規画（企画）する所、皆之を窮理に原（基）き、之を實歴に參し、算數に密に、事情に切に然らざるを得ざるに止まる。

固より未だ始より驚きて疑ふべき者あらず。本邦の人と雖も、苟も學んで之を習ひ、久しくして熟せば、則ち亦得て能くすべきなり。⁽¹¹⁾

本書を訳読した虎三郎は、その理路整然とした科学的な内容に感動し、圧倒された。本書に記載されている西洋軍事科学の内容は、数学や物理学など精緻な西洋近代科学の成果であり、とても日本人の及びえないところである。まさしく前代未聞の驚嘆すべき学問的な世界であったのである。

だが、日本人とて、西洋人と同じ人間である。今後、日本人も、西洋科学を學んでいけば、決して修得できないはずはない。必ずや我が物とすることができる。そう、彼は考えた。西洋の未知の学問的世界に触発された彼の衝撃的な感動が、素直に吐露されている。

このように、精緻で合理的な西洋近代科学の優秀性を冷静に認識し、これを我が物とすべく、臆することなく果敢に挑んでいくべきことは、「東洋道徳・西洋芸術」思想を説く象山が、私塾教育で常に門人たちに徹底して説諭し奨励していたところであった。謹慎中にオランダ原書を次々と訳読し、西洋科学の吸収に没頭する虎三郎の態度は、恩師象山の教えを誠実に実践躬行したものであった。

虎三郎は、「苟も以て敵を制すべくんば、則ち敵の為す所と雖も、亦必ず資として之を用ふ⁽¹²⁾」「其の長ずる所、資として以て自ら助くる能はず、以て醜虜の屈辱を受る。智と謂ふべけんや⁽¹³⁾」と述べ、今後は日本人も、本書のような洋書を基にした海防学の研鑽に向かうべきことを力説していたのである。安政二年（1854）五月、罪をえて謹慎生活

に入ってから二年目のことであった。

虎三郎は、明かりを閉じて人とも会わずに、このオランダ原書を一心不乱に訳読した際、込み上げてくる非常な思いを、蟄居謹慎という絶望的な身の上に重ね合わせて、次のように記している。

戸を閉じ人を^{しりぞ}け、閑かに此の書を^{しず}繙けば、回顧の際、感慨無くんばあらず。遂に其の後に書す。

安政二年乙卯、^{ほげつ}蒲月（五月）。^{そうしょうしょうにん}雙松樵人（きこり） 虎⁽¹⁴⁾

（2）西洋の物理学書「重学訓蒙」の抄訳（慶応元年）

本書もまた、虎三郎の翻訳したオランダ原書の中の一冊で、標題の「重学」とは「力学」を意味する。彼は、同書の訳稿に「重学訓蒙序」という序文を付し、その冒頭に「ひとりの身を以て十人の事を作し、百斤（斤は重量の単位、一斤は六〇〇グラム）の力を用ひて万斤の物を動かす。重学の利、亦大ならずや。」と述べている。したがって本書は、内容からみれば、「力学入門」とでも訳すべき蘭学書であった。

ところで、「重学」という書名を冠した西洋力学の日本への紹介書としては、すでに幕末期の安政六年（1859）に、中国駐在の英国人宣教師アレキサンダ・ワイリ（A.Wylie）原著の漢書『重学浅説』が日本で翻刻され、幕府によって刊行されていた⁽¹⁵⁾。これが、管見の限りでは「重学」という学問分野での西洋科学書の日本への紹介の最初と考えられる。残念ながら、その内容を知るよしはない。この九年後に、虎三郎は「重学訓蒙」を抄訳したのである。

虎三郎が訳読した『重学訓蒙』というオランダ原書が、はたして幕府翻刻の書物と同じ原書であったかどうかは、確認することができない。だが、虎三郎は、漢書の翻刻版で読んでいたのではなかった。『重学訓蒙』は、虎三郎がオランダ語の原書から直接、翻訳した書物であった。このことは、彼が同書に付した「重学訓蒙序」という次の一文からも確認することができる。

^{ちかころたまたま}頃者偶々荷蘭人の著す所の重学訓蒙なる者を獲て、之を読むに、其の事^{ひさい}鄙細に似た

りと雖も、民生日用に於て実にし、殊に切要と為す。因りて自ら^{はか}掃らずも、訳するに国語を以てし、以て夫の^{かんきょう}寒郷（田舎）^{ばんせい}晩生（後輩）の斯の学に志ありて、未だ洋文に習はざる者に示し、之をして其の端緒を窺ふを得せしむ。（中略）

今、余が訳述する所、拙陋と曰ふと雖も、上にしては政に従ひ官に服する人、下にしては豪農鉅商^{きよしやう}（豪商）の徒、或は得て之を読まば、以て彼の国の重学の精備は、本邦漢土の未だ夢にも見ざる所なるを知ることに於て、家国民生に於ける裨益窮めて大ならん。遂に其の理を推尋し、其の器を購造（製造）して、これを諸の實事に施さば、則ち富強の本、乃ち其の一を得ん。豈小補と曰はんや。⁽¹⁶⁾

上記の引用文によって、彼はオランダ語の原書を翻訳したこと、しかも訳述するに際しては「国語」、すなわち漢字仮名交じりの日本語で表記し、オランダ語を解することのできない日本の田舎者や後学者にも読めるように工夫したこと、などが明らかとなる。

彼の抄訳において特に注目すべきは、オランダ語を日本語に翻訳する際の訳文の苦心である。すなわち彼は、誰でもが読める平易な日本語（漢字仮名交じり文）に執着していたのである。実は、このように平易な日本語の訳文にこだわる態度は、維新後の彼が、平民教育の実現を期して簡明な国文による歴史教科書『小学国史』（全十二巻、明治六年刊行）を編纂し刊行する伏線となっていたのである。

以上の内容は、「重学訓蒙序」に記されたところであるが、さらに虎三郎は、訳稿の最後に付すべき後序、すなわち「重学訓蒙後序」という一文も書いていたのである。

「^{すいてんしゃ}水碾車なる者は、西洋重学器の一つなり」との書き出しではじまる後序において、虎三郎は、要するに「重学」とは日本の村々で利用されている水車の挽き臼のことであり、そこに隠れている重いものを軽く動かす科学を意味するのだ、と平易に説明している。

日本人は、経験知によって生み出された文明の利器を当たり前のこととして利用している。だが、その一つひとつに普遍的な科学の原理が潜んでいること、しかも、その原理は様々な物を生み出す原動力となること説き示し、そのような「西洋重学」に認められる「西洋芸術」の卓越性に刮目すべきこと、これを活用すれば国家民生にとって極めて有益であること、などを次のように具体的に論述している。

夫れ、一器の^{たまたま}偶々行はる、其の制の未だ備らず、其の施の未だ普からざるを以て、猶且つ此くの如し。果して衆器をして悉く行はれ、其の制をして能く備はり、其の施を

して能く普からしめば、則ち其の利又如何ぞや。西洋重学の家国民生に於て、一日として焉これ ゆるを緩やかにすべからざる者、これを此に観るに、其れ亦以て瞭然として疑ひ無かる可きかな。

余重学訓蒙を訳すあたに方り。客の城東の諸村水碾車すいてんしゃの事を以て余に語る者あり。因りて之を叙述して以て後序となす。⁽¹⁷⁾

(3) 西洋の軍事地理学書「察地小言」の抄訳（慶応二年）

抄訳に至る経緯

本書もオランダ原書の兵学書であった。虎三郎は、本書を江戸の象山塾時代に恩師象山から拝領し、この内容の重要性を教え諭されたとして、自らが草した「察地小言後序」の冒頭で、次のように記している。

虎、既に此の原本を象山先生に受く。先生、虎に謂ひて曰く、探候の事は機敏なる者にあらずんば、以て之に任ずるに足らずと。蓋し虎、資性ぼくろ ぼくぐ樸魯（樸愚）、機敏は尤も其の足らざる所と為す。故に特に以て戒むるのみ。⁽¹⁸⁾

さらにまた、虎三郎が、恩師象山から本書のオランダ原書を贈与されるに至った経緯が、訳書の冒頭に付した序文「察地小言序」に、次のごとく詳述されている。

ところで虎三郎は、嘉永四年（1851）三月、江戸の象山塾に入門、象山から儒学の教えを受ける傍ら西洋兵学をも学んでいた。そして、二年後の嘉永六年六月、ペリー米国艦隊の浦賀来航という事件に遭遇する。これを契機に虎三郎は、急速に西洋科学（西洋兵学・西洋砲術）の研鑽に向かい、象山の指導の下でオランダ原書の訳読に挑んでいくことになったのである。

虎は是より先、既に研経（儒教經典の研究）の暇を以て、泰西の礮ほう（砲）隊銃陣の法を先生（象山）に受くれば、則ち又益ますます力を此に用ひ、以て爪牙そうが（防衛）の用を致すを求む。乃ち窃せつに以て謂へらく、用兵は地の利を得るを貴ぶ。故に孫子十三篇は、従前兵を談ずる者の要訣と為す。而して地理を論ずる者、三其の一に居る。泰西の兵

術、近ごろに至って倍々進み、遠く本邦漢土の上に出づ。則ち察地の事、亦必ず其の精を極むる者有らん。既に之れ有り。而して未だ之を知らざるなり。砲隊銃陣、其の進退分合の法、平時に在っては、既に熟すと雖も、而も一旦敵に臨まば、^{たいがい}滞碍必ず多からん。^{いづく}悪んぞ敗を免かるを得んやと。⁽²⁰⁾

兵学における砲隊銃陣の用兵においては、「地の利を得る」こと、すなわち恩師の象山が説く、「土境の形勢、海陸道路の險夷（^{いんじゆ}陰阻と平坦）、外蕃（外国）の情状、^{ぼうじゆ}防戍（防衛）の利害、^{じやうほ}城堡（^{とちやう}城壁）・^{ぼうらい}堵堞（^{こうえん}防塁）・^{こうえん}控援（統率）⁽²¹⁾」が大切なことなのである。それ故に、陣の配列において土地の形状を察知する「地理学」は、兵学上、極めて重要な学問である。西洋の兵学では、「砲隊銃陣の進退分合の法」として地理に関する学問が大いに発達しており、とても中国や日本の比ではない。恩師象山から西洋兵学の教授を受けた虎三郎は、そう痛感した。そこで彼は、兵学における土地の形状を探究する「察地」という学問について、恩師象山に質問をした。すると象山は、次のように教え諭したのである。

因ってこれを先生（象山）に質す。則ち曰く、子（虎三郎）の疑ひや善し。彼の国の兵家、固より^{いわゆる}所謂察地学なる者ありて、自ら一科を為すと。遂に把氏（オランダ人原著者）の書中に工兵察地篇を出して、以て^{これ}焉を示して曰く、是れ僅々数葉のみ。固より未だ備はれりとなさず。然れども之を孫子以下の地理を論ずる者に^{うかが}視へば、其の詳略精粗の^{へだた}相距ること亦已に天淵なり。今^{しやう}鈔（^{しやう}抜粹）して小冊子と為し、夫の一隊に将たり、及び探候（偵察）に任ずる者をして、皆預め熟復し、而も行軍の際、又之を懷裡に^お置（置）き、臨時に檢閲せしむれば、則ち其の地の利を得ること、思ひ半ばに過ぎん。子（虎三郎）^な盍んぞ^{せんべん}先鞭を着けざるやと。⁽²²⁾

虎三郎の質問に対して、象山は兵学において、如何に地理に関する学問が重要であるか、西洋では「察地学」という独立した学問となっていることを説き、オランダ原書『工兵察地篇』を示し、この本の中の察地に関する「地理の部分」を抜き書きして訳読することを勧めたのである。

理路整然とした恩師象山の教えに感動して奮起した虎三郎は、「虎大いに喜び、一本を鈔して以て読む。⁽²¹⁾」と、直ちにオランダ原書を書写して冊子にまとめ、これを読み耽った。ところが、不運にも虎三郎は、この直後に恩師象山の横浜開港説を奉じて藩主や老中

に上書し、これが罪をえて帰藩謹慎を命じられてしまったのである。安政元年（1853）一月、数えて二十六歳のときであった。

彼は、江戸の象山塾時代に入手した文献資料、とりわけオランダ原書の数々を長岡に持ち帰った。それから幾歳月が流れ、激動する幕末期の十余年が経過した慶応二年（1869）の初秋、幕府の第二次長州征伐に出征する長岡藩の兵士たちに対して、難病を患って出征できない虎三郎は、かつて抜き書きして訳読したオランダ原書『工兵察地篇』の中の「地理の部分」を、平易な漢字仮名交じりの国文をもって翻訳し、『察地小言』と題した小冊子にまとめて彼らに配布し、彼らの無事の帰還を祈った。虎三郎訳『察地小言』の誕生であった。以上の経過を、彼自身が、序文の中で次のように記している。

既に花旗（米国）再び来り、貿易の約成る。復、兵を用ふるに至らず。而して虎忽ち罪を獲て以て帰る。未だ幾ばくならざるに又沈痼（長患い）に罹り、之を高閣（高樓）に束ぬること已に十余年なり。

今茲に長藩（長州藩）益々傲るを憂ひ、列藩命を奉じて討勦（討滅）す。而して我が公焉に与す。虎乃ち深く其の疾の益々痼にして、従て方剛（正しく強い）の力を致す能はざるを慨き、則ち遂に旧本を出し、訳すに国字を以てし、名づけて察地小言と曰ひ、以て平生同憂の士の軍に従ふ者に貽る。庶幾はくは其れを省察して、以て滞碍（滞礙）の患を免るる所あらん。而して区々敵愾（敵対）の志も亦少しく伸ぶるを得んか。⁽²³⁾

江戸で恩師と別れてから十有余年、長岡の自宅「求志洞」に籠もって、翻訳書『察地小言』を仕上げようとする虎三郎。だが、不遇な身の上に追い打ちをかけるような難病の苦痛に、彼は耐えきれなくなるときがある。そんな彼の萎える心を奮い立たせたのは、恩師象山の姿であった。彼は、ままならない試練の逆境にあるとき、常に恩師の象山を思い起こした。そして江戸の私塾で賜った恩師の一言半句を反芻して奮起し、ひたすらに原書の翻訳に立ち向かったのである。そのような心境を、彼は『察地小言』の序文の最後に次のように記している。

癸丑（嘉永七年）より今（慶応二年）に至るまで、一紀（十二年）に過ぎざるに、世局の変換、既に已に此くの如し。而して忠智国を憂ふる、象山先生の若き者、示諭

の言猶耳に在り。而して又殃（災禍）を其の間に免かるるを得ず。此れ則ち虎（虎三郎）が翻訳の間、俯仰回顧し、覺えず流涕して大息するところなり。

因って既に其の鈔訳（抄訳）の由を叙し、又附するに此を以てし、これを巻首に眞（置）く。慶応丙寅（二年）、孟秋下浣（七月下旬）。小林虎、炳文（虎三郎の号）病を力めて求志楼上に書す。⁽²⁴⁾

ところで、虎三郎が翻訳した『察地小言』（和綴一冊本）は、オランダ原書の兵学書『工兵察地篇』の抄訳であった。はたして原本が、如何なるオランダ語の訳語であるのか、原書名は判然としない。地理学的な観点から考究した西洋兵学書という斬新な同書は、管見の限りでは、従来の洋学関係の先行研究には登場せず、日本では全く未知の書物であった⁽²⁵⁾。したがって、その抄訳本である『察地小言』は、虎三郎によって初めて日本に翻訳・紹介されたものとみてよい。幕末期日本の洋学界に、未知のオランダ原書が虎三郎の翻訳によって付け加えられたていた、ということである。

その虎三郎訳の直筆本『察地小言』が、今、長岡市立中央図書館の文書資料室に完全な形で収蔵されている⁽²⁶⁾。同書には、虎三郎の象門長友であった三島億二郎の蔵書印が押されている故、虎三郎が億二郎に進呈したものとみて間違いないであろう。

虎三郎訳「察地小言」の内容

同書の表紙に記された正式な標題は『察地小言 単』（以下、『察地小言』と略記）であり、裏表紙には訳者である虎三郎の筆になる一文、「書は言を尽さず。言は意を尽さず。神にして之をあきらか問にするは、其の人に存す。訳者、題す。（文字は言いたいことを充分に表せない。言語は思っていることを充分に表せない。神妙の働きを尽くしてその理法を明らかにするのは、これを利用する者の資質如何による）」が記されている⁽²⁷⁾。

次に、「山田尚政」という人物の推薦文「読察地小言」が掲げられている。この序文を寄せた山田とは、長岡藩校崇徳館の恩師である山田愛之助（とうしよ到処）である。山田は、江戸に遊学し、幕府の昌平坂学問所の儒官である古賀侗庵（寛政の三博士のひとりである古賀精里の第三子）に師事して儒学（朱子学）を修め、さらに緒方洪庵と並び称される幕末西洋医学界の大御所である伊東玄朴に就いて蘭学を学んだ洋儒兼学の学者であった。

その山田が、郷里長岡に帰って藩校崇徳館の都講（校長職）を務めていた幕末期に、虎三郎は同校に入門して学問的な基礎を形成し、やがて藩校教官（助教）に抜擢されるわけ

である⁽²⁸⁾。地元長岡での恩師である山田こそは、江戸の象山塾に入門する前の虎三郎に、洋儒兼学の重要性を率先垂範してみせた理想の学者であった。伝統的な朱子儒学から洋学（蘭学）を学び取り、東西両洋の学問を統合した「東洋道徳・西洋芸術」という新たな学問や思想の世界を志向していた点において、山田と象山とは同じ学問的系譜にあったとみてよい。

生涯に亘って象山を恩師として敬仰した虎三郎にとって、象山亡き後、翻訳なった『察地小言』の推薦序文を、山田に依頼することは、敬慕してやまない旧師の学恩に報いることであり、最も喜びとするところであった。愛弟子である虎三郎の学問的成果に接した彼は、「今、この訳書を読んで、書いてあることは切実であり、訳文もわかりやすく読みやすい。」「この本は今現在まさに必要である。」との心温まる推薦文を寄せたのである⁽²⁹⁾。

上記のような山田の推薦序文に続いて、本書の内容を構成する目次の全体を表す、次のような「察地小言目録」が掲げられている。

「 察地小言目録

山地

山

ベルグエンゲテ

山路

樹園

林

湧泉

橋梁

村落

ホルト
福尔多

ケヒュクト

ヘイデハーゲ

凹路

インオンダチー

カナル
笕

カステール

海岸

田野

レーグルブラーツ
陣地

各地気候

プロヒル

河

攻戦察河法

守戦察地法

市集

ステルリング
陣地

攻戦陣地

守戦陣地

城

池沼 沮如) 黒沆土

平地

渉処

道路

葡萄園

ウインテルタウアルチール

」

以上のような「内容目録」が付された虎三郎訳の『察地小言』は、原著者の序文に記されているごとく、軍隊の戦地への進退行動、野営陣地の選定などを、如何に安全かつ迅速に展開するかという軍事的な観点から、「地理ヲ察スル法」を詳細に説き示した地理学書である。

具体的には、軍事目的の実現のために必要な地理学的な知見や心得の数々が、全五十八章の構成で、虎三郎の墨書した翻訳の冊子では和紙五十八丁綴（59頁）に亘って実践的に講述されている。

そのような虎三郎訳『察地小言』は、幕末維新时期において他に類書をみず、現在まで全く知られることのなかった本邦初公開の洋学書—軍事地理学書であった。同書の洋学史上における資料的価値の大きさに鑑み、本章の最後部に長岡市立中央図書館文書資料室所蔵

の原本から全文を解読して紹介しておくこととする。

(4) 西洋の軍事食料学書「泰西兵餉一班」の抄訳（慶応三年）

本書を抄訳するに至った動機

虎三郎が翻訳した「泰西兵餉一班」もまた、オランダ原書の兵学書を抄訳したものである。「兵餉」の「餉」とは、「携える食糧」「干した食糧」「兵糧」の意味であり、したがって「兵餉」とは「兵隊の食糧」ということである。虎三郎は、本書を後学の人々、特に軍関係者の教科書として公刊するという明確な意図を持って翻訳していた。彼は、このオランダの兵学原書を抄訳するに至った動機や経緯などを、「泰西兵餉一班序」という序文に記している⁽³⁰⁾。

それによると、抄訳の原本は、オランダ原書の兵学書（「おらんだほうたいカピタンバロイン荷蘭礮隊毘丹薄魯印」著す所の『従軍必携』という著書）である。虎三郎は、その兵学書を購入して訳読した結果、兵隊の健康管理にとって、如何に食事が深い関わりを有しているかを思い知らされ、西洋日新の新知识に恐懼したのである。そこで彼は、日本では全く未知の新知识である兵隊の食事に関する「兵餉篇」の重要性に鑑みて、その部分を抄訳して「泰西兵餉一班」というタイトル標題をつけたわけである。

近今泰西の各国深く此に察することあり。乃ち其の兵卒をして甘飽して以て其の健康を保たしむる所以の者、其の詳悉を極む。まこと洵に和漢古今の未だかつ曾てあらざる所なり。之を彼の国の兵志（兵書）に考ふるに歴々として見るべし。このごろ属者、余、ほうたい荷蘭礮隊カピタンバロイン加毘丹薄魯印著す所の従軍必携を購ひ獲て之を読むに、内に兵餉篇あり。語簡なりと雖も、而も夫の兵卒をして、甘飽して以て、其の健康を保たしむる所以の者、亦以て其の概略を觀るに足る。因て摘んで之を訳し、名づけて泰西兵餉一斑と曰ふ。以て子弟の兵を学ぶ者に授く。而して諸々の觀んことを請ふ者にも、亦敢へて隠さず。⁽³¹⁾

幕末期の日本には西洋日新の兵学書が、数多く翻訳紹介されていた。だが、兵隊の食事に関する本書のような内容は、本邦においては、いまだかつて見られなかった新知识である、と虎三郎は感嘆した。それ故に彼は、今後の日本でも兵隊を率いる将官は、本書を活

用して兵食の重要性を認識し、食事の面から兵隊の健康管理に配慮すべきであるとして、次のように述べている。

泰西の兵術は既に宇内（日本の国内）に冠たれば、則ち、我が列藩の軍政を經理する、固より専ら彼の制に倣^{なら}はざるを得ず。乃ち兵餉の一事も亦彼の為す所を取って以て参酌するにあらずんば、則ち必ず其の宜しきに適ふ能はず。然らば則ち此の書の載する所の若き、出でて兵に將たる者、固より知らざるべからず。入って供給を管する者、尤も知らざるべからず。此を知らずんば、兵卒をして、甘飽して以て其の健康を保ち、糜爛^{びらん}（腐乱）の惨を免れて、禍をして其の国に及ばざらしめんと欲するも必ず得べからず。而して彼の不仁不智の責、又悪くんぞ得て而して之を^{のが}道れんや。⁽³²⁾

山本有三『米百俵』に紹介された「泰西兵餉一斑」

虎三郎の蘭書翻訳については、山本有三も『米百俵』を著す際には注目して調査し、次のように述べている。

蘭書から抄訳したものには、「重学訓兼」「察地小言」「野戦要務通則」「泰西兵餉一般」などがあります。最初のもは、物理学の初歩を説いたものと思われま。あとの三つは、いずれも兵書で、家中の若さむらひたちに、その草稿を自由に読ませたものゝやようです。長岡藩での兵制の改革に取りかゝった時には、病翁は意見書といっしよに、これらの兵書を、藩の重役に提出しております。右の抄訳のうち、いま残っておるものは、「泰西兵餉一般」だけで、ほかのものは見あたりません。「泰西兵餉一般」一兵餉という字が、むずかしい字ですが、これは「ヘイショウ」と読みます。いくさの時の食料のことです。輜重^{しちゆう}（軍隊の荷物）の重要なことを説き、それに関する外国の模様を紹介したもので、慶応三年の夏に訳したものです。

この序文は「求志洞遺稿」のなかにも出ていますが、本文は載っておりません。それで珍しいと思いますから、こゝにちょっと持ちだしたのですが、珍しいと言え、本文のまっさきに出てくる「蒸餅」ということばも、珍しい言葉だと思います。これは蒸餅と書いてあつても、決して蒸したもちのことではありません。横に「ブロード」と振りがながしてあるのでもわかるように、今日のパンのことです。オランダ語では、パンのことをブロードと言いますが、ブロードとか、パンとか言つても、そう

いう西洋のことは、幕末の人にはわかりませんから、蒸餅という字をあてて、これは蒸したもちのようなものだということを示したものだろうと思われます。

この抄訳は、パンをはじめとして、西洋の軍隊で使うさまざまな食料のことを説明したもので、うしろのほうには、野菜の中に含まれている「衛養力」の分析表などもあげてあります。ついでながら、長岡藩では、ご一新の戦いの時に、パンを作っております。もっともそれは、この抄訳を手びきにして作ったものかどうか、そこまではわかりませんが、おそらくは、大事な参考書の一つであったろうと思われます。⁽³³⁾

有三は、上述の資料的な根拠として、抄訳「泰西兵餉一般」の現物（手書き草稿の第一頁）を、『米百俵』の中に写真版で掲載している。それ故に彼は、抄訳本の全文を読んでいたものと推察される。写真に収められた草稿の現物は、有三が『米百俵』（1945年）を出版した当時は、「長岡市教育会保管」と記されているが⁽³⁴⁾、その後の行方は全く不明である。有三の『米百俵』に掲載された写真の部分を解説すると次のようになる。

「 泰西兵餉一般

ブロード
蒸餅第一

蒸餅ハ純粋不雑ノ赤小麦若クハ白小麦粉ノ節ハズンデ凝塊ナク悪臭ナキモノヲ以テ製ス。之ヲ製シテ二十四小時、即チ一昼夜小時ハ我が春秋二分ノ時ノ半晴れト知ヘシ、ヲ経ルノ後其一枚ノ重サ一斤五両其中経二掌^{バルム}三^{ドイム}拇ヨリ二掌^{バルム}四^{ドイム}拇ニ至リ、其厚サハ八^{カサ}拇トス。故ニ二百五十枚ノ蒸餅ノ容一^{エル}肘立方トス、按スルニコレ、ソノ各個ノ實際ヲ除テ算ススモノナルバシ、而シテ百六十枚ノ蒸餅

」⁽³⁵⁾

なお、虎三郎の甥（実妹の次男）で東京帝国大学医学部教授となった小金井良精^{よしきよ}の孫で作家の星新一（本名は星親一）は、敬慕して止まない祖父を追悼して伝記『祖父・小金井良精の記』（河出書房新社、1974年）を刊行した。その中で、祖父の叔父である虎三郎についても詳述しているが、オランダ原書の翻訳書である「泰西兵餉一班序」についても、上記のような有三の『米百俵』の内容を踏まえて、次のように紹介している。

長岡の虎三郎は、依然として無役。藩どうしが戦う愚を知りながら、その防

止について意見をのべられる立場にない。蘭書を何冊か翻訳した。その一つに『泰西兵餉一班序』というのがある。戦時食料に関するもので、パンの製法、野菜の栄養成分などの内容である。ここは有数の米作地帯、パンの製法の紹介で、世の中は変るぞとの思いを表明したのかもしれない。⁽³⁶⁾

虎三郎が抄訳した「泰西兵餉一班」のような兵隊の食事に関する兵学書は、急増する幕末期の西洋翻訳書の中にも全く見当たらない。それ故、本邦では未知のオランダ原書から抄訳した本書は、虎三郎の先見性を示す学究的な成果であったといえる。惜しむらくは翻訳原本が、有三が『米百俵』を執筆した昭和十八年（1943）には存在が確認されていたが、その後、第二次世界大戦時の長岡戦災で焼失したと推測され、内容を確認できないことである。

この「泰西兵餉一班」の翻訳にも窺い知れる通り、虎三郎は、「西洋芸術」の優秀性や利便性を、西洋近代科学の単なる技術的な成果の次元でとらえるのではなく、新知識の裏側に潜む学問的な基礎にまで着目して理解しようとしていた。この点を看過してはならない。恩師の象山や門人の虎三郎にとって、「西洋芸術」とは単なる知識や技術の世界ではなかったのである。

（5）西洋兵学書「野戦要務通則一班」の抄訳（慶応三年）

本書も、虎三郎がオランダ原書の兵学書を抄訳したものである。その原書とは、前述の「泰西兵餉一班」と同じオランダ砲隊長「カビクンバロイン昆丹薄魯印」の著書『従軍必携』であった。この抄訳を冊子にまとめた経緯を、虎三郎は序文「野戦要務通則一班序」の中で次のように述べている。

西洋の兵学、科を分ち門を設くること無慮若干。而して野戦要務を以て其の一に置
くは、蓋し此の故を以てなり。其の科固もとより専書あり。事に洋兵に従ふ者、其の詳ら
かにして且つ備はる者を求めて、之を講ぜざるべからず。

余、荷蘭の薄氏の従軍必携を閲するに、其の内の野戦要務通則は、語簡に過ぐと雖
も、事目頗る多し。亦以て其の大凡を觀るに足る。因て抜いて之を訳し、一冊子と為

す。之を一斑と謂ふ者は、其の專書に非ずして、未だ詳らかに備はれりと為さざるを明らかにするのみ。大方の君子、固より取るなからん。然れども初学の士、目未だ蟹文（蟹文字、欧文）を知らざる者、或いは受けて之を読まば、則ち其の全豹^{ぜんぼう}を求むるに於て、未だ必ずしも助け無くんばあらずと云ふ。⁽³⁷⁾

オランダ原書の中の「野戦要務」に関する部分を抄訳した本書もまた、当時の日本の軍隊では未知の西洋兵学の入門書であった。冊子にして配布したという本書の訳稿は、現在、その存在を確認することができず、序文が残されているだけである。その序文を虎三郎が執筆したのは、明治と改元される前年の慶応三年（1867）のことであり、長岡藩も加わった幕府軍による第二次長州征伐の開戦直後のことであった。

さらに、この翌年には、越後長岡を舞台とした北越戊辰戦争が勃発する。まさに嵐の前の静けさが残る時期の翻訳であった。前述の「泰西兵餉一斑」といい、この「野戦要務通則」というも、征長軍に参戦できなかった虎三郎が、戦地に赴く長岡藩の同僚たちの身を慮って訳出した、極めて実学的な内容の兵学書であったといえる。

(6) 西洋歴史書「^{マセドニア}馬基頓二英主伝」の抄訳（翻訳年不詳）

この虎三郎の翻訳書には、「^{マケドニア}荷蘭維尼氏、万国小史抄訳」という副題が付されている。これによって、本書がオランダ人原著の『万国小史』の抄訳であることがわかる。これを虎三郎が、いつ抄訳したかは不詳である。が、江戸から帰省し長岡に蟄居謹慎して間もない安政年間の翻訳と推察される。⁽³⁸⁾

ところで、標題の「^{マセドニア}馬基頓二英主伝」とは、古代ギリシャ時代のヘレニズム世界に誕生したマケドニア（Makedonia）王国の二人の英雄の伝記、という意味である。その英雄とは、マケドニア王国を建国した「^{ヒリッパス}非立第二」、すなわちフィリップ二世（Philip II, 在位 359-336B.C.）と、その息子で後継者の「^{アレキサンドル}亜勒散得」、すなわちアレキサンダー大王（Alexander, 在位 336-323B.C.）である。

虎三郎が『万国小史』から抄訳した本書の内容は、フィリップ二世とアレキサンダー大王という英明なる親子の大王が、幾多の戦争を勝ち抜いてマケドニア人の王国を建国し、やがてはペルシャ帝国をも滅ぼし、エジプトからインドにまで至る史上空前の世界帝国を

建設していった武勇伝が叙述されている部分であった。

まず、虎三郎の抄訳の冒頭は、次のようなフィリップ二世によるマケドニア王国の建国物語からはじまる。

マセドニー ヒリップス
馬基頓王非立第二なる者は、アミンダス マセドニー ギリシヤ
馬基頓は希臘十二国の一となす。

始め王有りと雖も、微弱にして競はず。紀元五百十三年より四百七十九年に至るまで、
ベルシヤ
波斯の藩属（属国）たり。後も亦猶自主するを得ず。ヒリップス
非立出るに及んで、国始めて興る。

ヒリップス
非立人となり、深沈果敢にして権略あり。其の猶少なるや、国嗣定まらず、こうそう 詭争紛然たり。地品彼罷比大来って判決を為し、遂に非立をりゅう 拉して帰り、以て質（人質）と為し、之を埃巴米嫩大の家に養ふ。埃巴米嫩大は兵に精しき者なり。非立因これ って焉に学ぶ。発憤鑽研し、其のうんおう 蘊奥を窮む。才智大いに進む。異日能く本国の衰替すく を拯（救）ひ、一方に雄視し、嗣子の大業を開きし者、蓋し此に根ざすと云ふ。⁽³⁹⁾

しかし、連戦連勝で領土拡大を遂げていったフィリップ二世ではあったが、最大の敵であるペルシア帝国への遠征を目前にして暗殺されてしまう。この悲劇に臨んで、いまだ数えで二十一歳の息子アレキサンダーが即位したこと、哲人アリストテレス（Aristoteles, BC.384-322）の訓誡を受けて育った知勇兼備のアレキサンダー大王は、父親の悲願であったペルシヤ遠征を決行してペルシア帝国を滅亡させたこと、等々が、虎三郎によって次のように翻訳されている。

ヒリップス
非立事を挙ぐる、速成を欲せず。必ず始終の利否を審かにし、以て緩急疾舒（しつじょ 緩急）の宜しきを制す。故に前後大小数十戦、ベルモテュス、ビサンテュム二役を除くの外、未だ嘗って敗を取らず。業殆どまさ 將に成らんとして、一旦弑（しい 暗殺）に遭ひ、其の志遂げられず。衆焉を惜しむ。子これ 亜勒散得立つ。

アレキサンドル
亜勒散得なる者は、三百五十六年を以て、ベルラに生る。天資卓犖（たくらく 卓越）、幼より大志を負ふ。父非立嘗って敵と戦って勝つ。王聞いて泣く。人以て問ふことを為す。則ち曰く、大人我が功名の地を奪ふ。是を以て泣くのみと。ヒリップス
非立因って其の非常の器たるを知る。アリストテレスを使し之がふ 傳（守役）と為す。アリストテレスなる者は、博物の君子なり。しょうえきくにかい 奨掖訓誨、其の心力を尽す。王漸く長じ、才文武を兼ね、

雄略人に絶す。非立^{ヒリッブス}弒^{しい}に弒に遭ひ、王乃ち位を継ぐ。時に年二十一歳なり。⁽⁴⁰⁾

実は、恩師の象山には、「那波利翁^{ナポレオン}像に題す」という漢詩がある⁽⁴¹⁾。彼が、愛弟子である吉田松蔭の密航事件に連坐して幕府に捕縛され、地元の信州松代に蟄居謹慎という不遇の時期に詠んだ漢詩である。フランスの英雄ナポレオン（Napoleon Bonaparte, 1769-1821）は、幾度もの挫折に挫けず不死鳥の如くに復活し、フランス皇帝となった英雄である。象山は、不撓不屈のナポレオンを敬慕しつつ、^{れいぎよ}囹圄にある己自身を振起させていたのである。

その門人である虎三郎もまた、青春の蹉跎で学問への大志を挫かれ、越後長岡に蟄居謹慎の身にあるとき、オランダ原書の西洋偉人伝を訳読し、感銘深いフィリップ二世とアレキサンダー大王の部分を抄訳していたのである。虎三郎は、抄訳の最後を、国史を愛読して織田信長が明智光秀の謀反で自刃した悲運を嘆いて感泣したという、自らの幼少時における読書体験を想起しつつ、次のように結んでいる。

論に曰く、「^{アレキサンドル}亞勒散得、英才大略、固より千古に過絶す。然れども非立^{ヒリッブス}の之が前を為すあるに非ずんば、其の成功の速かなる、^{いづく}悪んぞ能く此くの如くならんや。」と。伝に曰く。創業統を垂るること、非立^{ヒリッブス}あり。^{アレキサンドル}亞勒散得をして獲て其の志を^お竟へしめば、則ち三洲の地を^{のうかつ}囊括（総括）して、以て大統を一にするの勢を定めんこと、吾其の難く非ざるを見る。然り而して、天之に年を借さず、偉業中ばにして廢す。惜しむに^た勝（堪）ふべけんや。余、幼時国史を読み、織田^う右府の削平（平定）の功、成るに垂んとして、俄に^{ぎやくじゆ}逆豎（青二才、明智光秀）に^{たお}斃れしを觀る毎に、未だ嘗って巻を^{おお}掩ふて泣かずんばあらず。今^{アレキサンドル}亞勒散得の事に於ても亦然りと。⁽⁴²⁾

虎三郎が抄訳したオランダ原書の『万国小史』は、少なくとも幕末期の日本には翻訳紹介されていなかったとみてよい。明治に入ると、作楽戸痴鴉訳『西洋英傑伝』（英国人著書、全六巻、明治二年）、河津孫四郎訳『西洋易知録』（英国人著書、全九巻、明治二年）、西村茂樹訳『泰西史鑑』（プロシア人著書の蘭訳書から重訳、明治二-十四年、全二十巻）などの西洋歴史書が、相次いで翻訳紹介されることとなる。

いまだ鎖国攘夷が大勢を占める幕末期に、やがて美談「米百俵」の主人公となる虎三郎が、オランダ原書の西洋歴史書を訳読して、マケドニア王国のフィリップ二世やアレキサ

ンダー大王を敬仰していたこと、さらにはギリシャの哲人アリストテレスの存在を認識していたことなどは、これまで全く知られることのなかった新事実である。さすれば、虎三郎による『万国小史』の抄訳は、わが国における先駆的な西洋歴史書の翻訳紹介であったとみることができる

(四) その他の蘭書翻訳による西洋新知識の吸収と展開

以上の他にも、虎三郎は、オランダ原書を媒介とした「西洋芸術」の吸収とその普及をめざした啓蒙活動を展開していた。その一つとして、彼が戊辰戦後に長岡藩大参事に選挙された時期に、一般民間人に周知徹底すべく編纂した『民間禁令』（明治三年春正月）という刑法書がある。この著書や草稿の存在を確認することはできない。だが、虎三郎が、この本を、如何なる趣旨で編纂したかを物語る序文「民間禁令序」が残されている。

それによれば、彼は「刑なる者は、夫の民の教に従はずして悪に入る者を懲さんが為にして設くる也⁽⁴³⁾」との考えから、新生長岡の復興に際して急ぎ本書をまとめたという。それは、ただに長岡の領民だけでなく、西洋の場合と同様、法治国家たるべき近代日本の国民に対しても周知徹底すべき法律書として編纂したということである。刑法の内容そのものは、「書経」や「春秋左氏伝」など、中国古典にみられる刑罰の記載を援用しつつ、既刊の西洋刑法書を概括したものである。

だが、同書を編纂するに至った動機は、彼が西洋近代の法治国家を知ったことにあった。その経緯を、彼は次のように記している。

余聞く。「西洋各国法律の書は、至って詳、至って悉、而して独り彫刻して頒布するのみにあらず、又以て^{せいみん}齊民（一般人民）必学の科と為す。故に齊民皆法律の概を知らざるなく、^{しやうごく}訟獄（訴訟）自ら^{すく}寡なし。其の或いは之有らば、有司先づ審かに其の情を訊ね、然る後に判して曰く、汝が訟ふる所、律の某条に合せず。故に曲に属す。汝が犯す所、律の某条に当る。故に処するに某刑を以てすと。訟ふる者、犯す者、皆復辞を措く所なし。甘心して罪に服す。」と。（中略）

方今国家の務めは、宇内の至善を択んで、経邦の大典を定むるに在れば、則ち西洋法律の書の若きは、有志の士に於て、宜しく^{さんかく}参覈すべき所と為すは、固より論を待た

ざるなり。但々余、疾益々痼に、神益々耗し、蟹文（洋書）の籍を繙かんと欲するも、得べからず。僅に一二邦人訳す所の者に就いて、其の一斑を窺ふのみ。悪んぞ以て其の要を摘して、之を述ぶるに足らんや。天下の大、固より傑俊の士に乏しからず、必ず当に能く其の全豹を見、訳して之を出して、以て東方の未だ備らざる所を補ふ者有るべし。余則ち刮目して以て待つ。⁽⁴⁴⁾

西洋の近代国家では、裁判制度を基本とする刑罰制度が整い、公平な刑罰がなされている。だが、西洋に比すれば東洋の日本には、そのような刑罰制度はなく、今こそ近代国家に相応しい法体系の整備が急がれる。できうれば自分が西洋の刑法書を訳読して刑法制度をまとめた。だが、それは持病の悪化で不可能である。それ故、すでに翻訳刊行されている西洋の刑法関係文献を斟酌して、急ぎ刑法の概説書である「民間禁令」を物にした。今後、これを契機に本格的な刑法書が出現することを待つのみである。法治国家としての近代日本の構築を希求する虎三郎の思いが、本書の編纂には込められていたのである。

以上のような内容の序文は、虎三郎の心中を吐露したものである。彼は、日本近代化の発信源である東京から遠く離れた、越後長岡という地方の小さな窓から、明治の夜明けに法治国家としての近代日本の国家像を、西洋近代国家をモデルとして描こうとしていた。

「万古の月」に照らされた「万古の心」を生き抜こうとする虎三郎の、まさに日本近代化を遠望する宏遠な眼差しであったといえるであろう⁽⁴⁵⁾。

おわりに

ペリーが浦賀に来航した翌年の安政元年（1854）、罪をえて越後長岡に蟄居謹慎した虎三郎は、以来、戊辰戦争が勃発する前年の慶応三年（1867）までの間に、恩師象山に捧げた処女論文「興学私議」をはじめ、様々な詩文を執筆した。と同時にまた、江戸の象山塾で修得したオランダ語の読解力を活かして幾冊ものオランダ語の原書を訳読していた。

特に有益と思われる部分は抄訳して冊子にまとめ、これを関係者に頒布していたのである。本稿で取り上げた翻訳（抄訳）以外にも、彼が取り組んだ翻訳の成果があったかも知れない。だが、資料的な裏付けがなく、確認することはできない。

次に、本稿が取り上げた虎三郎の翻訳成果を通して認められる特徴を、いくつか指摘しておきたい。

- (1) 虎三郎が翻訳した「籌^{ちゆうかい}海試説」「重学訓蒙」「察地小言」「泰西兵餉一班」「野戦要務通則一班」「馬基頓^{マセドニー}二英主伝」は、いずれもオランダ原書の抄訳である。「重学訓蒙」は物理の力学書、「馬基頓^{マセドニー}二英主伝」は西洋の歴史書であり、その他の四冊は、いずれもオランダ軍人の著した西洋兵学書の抄訳であった。

その中で唯一、抄訳して頒布した冊子が現存するのは『察地小言』のみである。同書の全文を知ることができる故、本章の最後に全文を解説紹介しておくこととした。しかし、他の作品の場合は、訳稿も冊子も所在を確認することができない。だが、いずれの場合も、虎三郎がオランダ原書から翻訳したことは間違いのない事実である。その証として、それぞれの抄訳には、虎三郎が執筆した「序文」または「後序」が残されている。

- (2) 虎三郎が翻訳した西洋兵学を中心とするオランダ原書の抄訳内容は、いまだ幕末期の日本には紹介されていなかった、西洋日新の新知识であった。本稿が取り上げた虎三郎の翻訳した作品は、管見の限りでは、いずれも現在の洋学史研究の成果の中に確認できるものは一つもない。したがって、本邦初訳の貴重な作品とみることができる。

- (3) 虎三郎は、本稿で取り上げた幾冊もの翻訳活動の直後、長岡藩大参事に選挙されて戊辰戦後の長岡復興に尽力し、美談「米百俵」の主人公となる。だが、その直後の明治四年（1871）八月に実施された廃藩置県によって、忠誠と奉公の対象であった長岡藩が消滅する。これを機に虎三郎は、いまだ復興途上にあつた郷里長岡を去って東京に向かう。

上京後の虎三郎は、難病に蝕まれた病軀に鞭打って、積極果敢に学究的な文筆活動を展開する。その成果の一つが、中国在住ドイツ人宣教師の執筆した漢書『大徳国学校論略』（1873年）を、明治初期の日本に翻刻紹介した業績であった。この翻刻活動もまた、彼が幕末期に展開した西洋新知识の翻訳活動の延長とみることができる。

- (4) 幕末期に展開された虎三郎のオランダ原書の翻訳活動において注目すべきは、彼が常に平易な国文（漢字仮名交じり文）の日本語訳を心掛けていたことである。多くの日本人が、身分や地域などの教育的差違を超えて、西洋日新の新知识を学ぶことがで

きるようにという、平民教育の実現を願う彼の教育的な配慮からであった。

そのような虎三郎は、明治に入って間もなくに本格的な国字改革論を展開し、自ら率先して平易な漢字仮名交じり文の教科書作りを実践してみせた。歴史教科書『小学国史』（全十二巻）の編纂刊行である。彼が教科書編纂に具体化した国字改革の主張は、国民皆学を国是として維新政府が進める教育政策を実現するためには、不可避的な国家的問題であることを浮き彫りにしたのである。

わが国における本格的な国字改革の論議は、早くも明治維新の前後に沸騰した。幕臣の前島密をはじめ、西周や福沢諭吉、西村茂樹などが、国字改革論の先駆者であった。虎三郎もそのひとりであった。いな、虎三郎こそは、彼ら著名人に先んじて平易な国字国文への改革を主張し実践した嚆矢であったのである。実は、そのような彼の国字改革の思想は、幕末期における彼の翻訳活動における平易な日本語訳の主張と実践とに看取することができるものであった。

以上、虎三郎のオランダ原書の翻訳活動に示された特徴のいくつかを指摘した。彼の翻訳活動のほとんどは、最も不遇で病軀にあえぐ幕末期の十余年に及ぶ塾居謹慎の時期に、しかも相次ぐ難病との格闘の中で展開された。

本章で取り上げた一連の翻訳活動の直後に、越後長岡を舞台とする北越戊辰戦争が勃発する。結果は、長岡藩は政府軍に無条件降伏し、古い城下町の長岡は焼土と化した。期せずして戦後復興の重責を担わされた虎三郎は、教育立国主義をもって人材育成のための学校建設を復興政策の優先課題とした。その結果が、美談「米百俵」の誕生であった。彼が新築開校した藩立の国漢学校は、儒学と国学、それに洋学の三学を兼学する新時代に対応した近代学校であった。そこには、紛れもなく虎三郎の教育立国思想が反映されていた。

実は、その彼には、オランダ原書を翻訳できる語学力とその成果としての翻訳書が幾冊もあったのである。彼は、儒学者であると同時に洋学者であり、恩師象山の「東洋道徳・西洋芸術」という学問思想を、明治初期の日本近代化過程に具体化した最も誠実な門人であったといえる。

【 注 】

- (1) 江戸時代における西洋知識の受容と普及に関しては、膨大な数の洋学史研究の蓄積がある。江戸時代以来、蓄積されてきた先行研究の具体的な内容については、大槻如電編『新撰 洋学年表』（柏林社書店、1927年）および大槻如電原著・佐藤栄七増訂『日本洋学編年史』（鳳文書館、1995年）、日蘭学会編『洋学関係研究文献要覧』（日本アソシエーツ発行、1984年）などを参照されたい。
- (2) 坂本保富『幕末洋学教育史研究』（高知市民図書館、2004年）を参照されたい。同書は、幕末期に全国規模で急展開する洋学教育の状況に関して、幕府や全国の諸藩が不可避免的に西洋近代化を進めざるを得なかった軍事科学（西洋兵学・西洋砲術）の導入展開という観点から、幕末期土佐藩関係の膨大な洋学関係史料「徳弘家資料」を解説分析した研究書である。
- (3) 佐久間象山『省響録』、岩波文庫版、33頁。
- (4) 象山の漢詩は、小金井権三郎、小金井良精編『求志洞遺稿』（1894年）、所収「詩坤」の部（二丁裏-三丁表）に収められている。漢詩の原文は次の通りである。
- 「 象山先生詩
火輪横恣転江流。非是君臣悞日秋。忠義要張神国武。功名欲伐虜人謀。
東圻起堵曾陳策。南島賒船蓋有猷。兵事未聞巧之久。何人速解熱眉憂。」
- （『求志洞遺稿』所収「詩坤」の部、二丁裏-三丁表）
- 「 象山先生詩
火輪（蒸気船）横恣して江流に転ず。是れ君臣日を悞る秋に非ず。忠義神国の武を張らんことを要す。功名虜人（西洋人）の謀を伐たんと欲す。東圻堵を起すは曾ち策を陳ぶ。南島船を賒る蓋ぞ猷（はかりごと）有らざる。兵事未だ巧みの久しきを聞かず。何人か速かに熱眉の憂を解かん。」
- (5) 虎三郎の漢詩「癸丑六月。弥利堅使節彼理。率兵艦四艘。来浦賀港。」は、同上『求志洞遺稿』所収「詩坤」の部、二丁裏-三丁表。
- (6) 前掲『省響録』、43-44頁。
- (7) 虎三郎の漢詩「奉懷象山先生」（象山先生を懐ひ奉る）は、前掲『求志洞遺稿』所収「詩坤」の部、七丁裏。

- (8) 虎三郎の漢詩「読洋書」は、同上『求志洞遺稿』所収「詩坤」の部、八丁表。原文の漢詩は次の通りである。

「 読洋書

洋儒窮物理。輓近滋々精明。剖析入微眇。万象無遁情。創意製人血。全然若天成。洋人磷酸鉄礪砂揮發華鷄子白食、食塩四品而混合之、加以瓦爾華尼電気、經十二少時則化而為血、与天成之物無以異也。神会乃至斯。造物豈無驚。味者卻娼嫉。謗議謾縦横。何人執箴石。痛下破心盲。」

- (9) 「書手写諳厄兒氏籌海試説後」は、同上『求志洞遺稿』所収「文」の部、三三丁表-三三丁裏。

- (11) 「書手写諳厄兒氏籌海試説後」、同上『求志洞遺稿』所収「文」の部、三三丁裏。原漢文は次の通りである。

「 曩象山先生掲而示焉。曰。本邦四面皆海。而東西諸蕃。舟楫之術。日以滋精。其有衝突剽掠之虞。何啻荷蘭。則若此書。凡留心於辺事者。不可不取一通以置之座右。虎拜受之。写以蔵焉。」

- (11) 「書手写諳厄兒氏籌海試説後」、同上『求志洞遺稿』所収「文」の部、三三丁裏。原漢文は次の通りである。

「 今読之。觀其所論。自砲台之築造。火器之主用。軍須之儲蓄。点放之機宜。以及夫水兵応接犄角之法。率皆本邦之人。思慮所未嘗至。始則愕然而驚。茫然而疑。殆若不可及者焉。徐而思之。則渙然而釈。沛然而疏。乃信其所規画。皆原之窮理。参之実歴。密乎算数。切乎事情。而止乎不得不然。固未始有可驚而疑者。而雖本邦之人。苟学而習之。久而熟焉。則亦可得而能也。」

- (12) 「書手写諳厄兒氏籌海試説後」、同上『求志洞遺稿』所収「文」の部、三四丁表。原漢文は「苟可以制敵。則雖敵所為。亦必資而用之。」

- (13) 「書手写諳厄兒氏籌海試説後」、同上『求志洞遺稿』所収「文」の部、三四丁表。原漢文は「其所長不能資以助自。而以受醜虜之屈辱。可謂智哉。」

- (14) 「書手写諳厄兒氏籌海試説後」、同上『求志洞遺稿』所収「文」の部、三四丁表。原漢文は「閉戸屏人。閑繙此書。回顧之際。不無感慨。遂書其後。安政二年乙卯蒲月雙松樵人虎。」

- (15) 『日本洋学編年史』(大槻如電著、佐藤栄七増訂、1965年)には、幕府が中国漢籍を官板として翻刻した英国人著『重学浅説』という書物が、安政六年(1859)の項に記載されており、そこには次のような解説が付されている。同書において「重学」と表記された文献

は、本書のみで、虎三郎が抄訳した冊子『重学訓蒙』は記載されていない。

「英国人偉力重力の撰。志那宣教師アレキサンダ・ワイリ (A.Wylie) の力学に関する漢籍を、幕府にて官板として翻刻したるものなり。」

- (16) 「重学訓蒙序」、前掲『求志洞遺稿』所収「文」の部、九丁裏-十丁表。原漢文は次の通りである。

「頃者偶獲荷蘭人所著重学訓蒙者読之。其事雖似鄙細。而実於民生日用。殊為切要。因不自揣。訳以国語。以示夫寒郷晩生。有志斯学。而未習洋文者。俾之得窺其端緒矣。(中略)今余所訳述。雖曰拙陋。然上而從政服官之人。下而豪農鉅商之徒。或得而読之。於以知彼国重学之精備。本邦漢土所未夢見。而於家国民生。裨益窮大。遂推尋其理。購造其器。而施諸実事。則富強之本。乃得其一焉。豈曰小補。」

- (17) 「重学訓蒙後序」、同上『求志洞遺稿』所収「文」の部、十丁裏-十一丁表。原漢文は次の通りである。

「夫以一器之偶行。其制未備。其施之未普。而猶且如此。果使衆器悉行。其制能備。其施能普焉。則其利又如何也。西洋重学。於家国民生。不可一日而緩焉者。觀諸此。其亦可以瞭然無疑夫。余方訳重学訓蒙。客有以城東諸村水碾車之事語余者。因叙述之以為後序。」

- (18) 「察地小言後序」、同上『求志洞遺稿』所収「文」の部、十丁裏-十一丁表。原漢文は次の通りである。

「虎既受此原本於象山先生。先生謂虎曰。探候之事。非機敏者。不足以任之。蓋虎資性樸魯。機敏尤為其所不足。故特因以戒焉耳。」

- (19) 「察地小言序」、同上『求志洞遺稿』所収「文」の部、十一丁表-十一丁裏。原漢文は次の通りである。

「虎先是既以研經之暇。受泰西礮隊銃陣之法於先生。則又益用力於此。以求致爪牙之用。乃窃以謂用兵貴得地利。故孫子十三篇。為從前談兵者之要訣。而論地理者。三居其一。泰西兵術。至近倍進。遠出本邦漢土之上。則察地之事。亦必有極其精者。既有之矣。而未之知也。砲隊銃陣。其進退分合之法。在平時。雖既熟。而一旦臨敵。滯碍必多。惡得免敗哉。」

- (20) 前掲『省譽録』、33頁。

- (21) 「察地小言序」、同上『求志洞遺稿』所収「文」の部、十一丁裏。原漢文は次の通りである。

「因質諸先生。則曰子之疑善矣。彼国兵家。固有所謂察地学者。而自為一科。遂出把氏

書中工兵察地篇以示焉。曰是僅々教葉爾。固未為備矣。然視之孫子以下論地理者。其詳略精粗之相距。亦已天淵矣。今鈔為小冊子。使夫將一隊及任探候者。皆預熟復。而行軍之際。又之真懷裡。臨時檢閱焉。則其於得地利思過半矣。子盍先着鞭。」

- (22) 「察地小言序」、同上『求志洞遺稿』所収「文」の部、十一丁裏。原漢文は「虎大喜。鈔一本以読。」
- (23) 「察地小言序」、同上『求志洞遺稿』所収「文」の部、十一丁裏。原漢文は次の通りである。
「既而花旗再来。貿易約成。不復至於用兵。而虎忽獲罪以帰。未幾又罹沈痾。束之高閣。已十余年矣。今茲憂長藩益傲。列藩奉命討勦。而我公与焉。虎乃深慨其疾益痼。不能從而致方剛之力也。則遂出旧本。訳以国字。名曰察地小言。以貽平生同憂之士從於軍者。庶幾其有所省察。以免滯碍之患。而区々敵愾之志。亦得少伸乎。」
- (24) 「察地小言序」、同上『求志洞遺稿』所収「文」の部、十二丁表。原漢文は次の通りである。
「癸丑至今。不過一紀。世局變換。既已如此。而忠智憂国。若象山先生者。示諭之言。猶在于耳。而又不得免殃其間。此則虎翻譯之間。俯仰回顧。不覺流涕而大息者矣。因既叙其鈔訳之由。又附以此。而真卷首。慶応丙寅孟秋下浣小林虎炳文力病書於求志楼上。」
- (25) 虎三郎が翻譯した『察地小言』は、先行研究を収めた洋学関係の文献、例えば大槻如電修『新撰 洋学年表』、大槻如電原著・佐藤栄七増訂『日本洋学編年史』、さらにまた日蘭学会編『洋学史事典』などにも、全く紹介されていない。
- (26) 虎三郎が翻譯し手書して冊子にまとめた『察地小言 単』の原本は、長岡市立中央図書館の分館「互尊文庫」（旧市立図書館）の2階にある「文書資料室」所蔵の「相沢富士雄家文書」の中に収められている。
- (27) 虎三郎の裏書きの原漢文は次の通りである。
「書不尽言々言不尽意神而問之存乎其人。訳者題」（書は言を尽さず。言は意を尽さず。神にして之をあきらか問にするは、其の人に存す。訳者、題す。）
- (28) 山田政尚、名は錫、通称は愛之助、はじめ劔嶽と号し、後に到处と改めた。長岡藩医の家に生まれ、藩内の諸師に学んだ後、藩命を受けて江戸に遊学、幕府儒官の古賀侗庵に儒学を、伊東玄朴に蘭学を学んで帰藩。藩校教授となり虎三郎や河井継之助などを教え、やがて都講（校長）に就任して幕末期の藩校を支えた。戊辰戦争では、虎三郎と同じく非戦恭順を主張し、戦後は小千谷民政局や柏崎県に出仕して学政を担当した。退職後は枋尾に移り住み、私塾「到处塾」を開いて地域教育に尽くし多くの人材を育成した。

以上は、今泉省三『長岡の歴史』第六卷(野島出版、1972年)、『長岡歴史事典』(長岡市、2004年)、『ふるさと長岡の人びと』(長岡市、1998年)などを参照した。

(29) 山田政尚の推薦序文の原漢文は次の通りである。

「 読察地小言

地理之開戦争也大矣、是以訳人云当説之然語而不詳故非身経其事在漫然看過無所用意頃日西征之師取敗者争因干此矣、今閱此訳書其言切実訳明読之自不得不警省実得洋書之其面目在款嗚呼使彼軍中一有知之在則不至於取敗矣、然則此書之於方今可謂必用矣、訳者之意其在于此願其在乍此款。

慶応二年丙寅十月

山田尚政 識

」

(30) 「泰西兵餉一斑序」は、前掲『求志洞遺稿』所収「文」の部(十三丁表-十四丁表)に 所収。

(31) 「泰西兵餉一斑序」、同上『求志洞遺稿』所収「文」の部、十三丁裏。原漢文は次の通りである。

「 近今泰西各国。深有察於此。乃其所以使兵卒甘飽以保其健康者。極其詳悉。洵和漢古今所未曾有。考之彼国兵志。歴々可見。属者余購獲荷蘭砲隊加毘丹薄魯印所著從軍必携読之。内有兵餉篇。語雖簡。而夫所以使兵卒甘飽以保其健康者。亦足以觀其概略。因摘而訳之。名曰泰西兵餉一斑。以授子弟兵学者。而諸請觀者。亦不敢隱焉。」

(32) 「泰西兵餉一斑序」、同上『求志洞遺稿』所収「文」の部、十三丁裏-十四丁表。原漢文は次の通りである。

「 嗚呼泰西兵術。既冠宇内。則我列藩經理軍政。固不得不專倣彼制。乃兵餉一事。亦非取彼所為以參酌。則必不能適其宜。然則若此書所載。出而將兵者。固不可不知。入而管供給者。尤不可不知。不知此。而欲使兵卒甘飽以保其健康。免糜爛之慘。而禍不及其国。必不可得。而彼不仁不智之責。又惡得而道之哉。」

(33) 山本有三『米百俵』(新潮社、1945)、192-196頁。

(34) 同上『米百俵』、197頁。

(35) 同上『米百俵』、193頁の「泰西兵餉一斑」第1頁の写真版より解説。

(36) 星新一『祖父・小金井良精の記』(河出書房新社、1974)、34頁。

(37) 「野戦要務通則一斑序」、同上『求志洞遺稿』所収「文」の部、十三丁裏-十四丁表。原漢文は次の通りである。

「 西洋兵学。分科設門。無慮若干。而以野戦要務置其一。盖以此故也。其科固有專書。從

事乎洋兵者。不可不求其詳且備者而講之。余閱荷蘭薄氏從軍必携。其内野戰要務通則。語雖過簡。而事目頗多。亦足以觀其大凡。因拔而訳之。為一冊子。謂之一斑者。明其非專書。而未為詳備爾。大方君子。固無取焉。然初學之士。目未知蟹文者。或受而讀之。則其於求全豹。未必無助云。」

(38) 「馬基頓二英主伝」の翻訳年月は不詳であるが、虎三郎の遺稿集『求志洞遺稿』では、編集上、彼の翻訳作品の最初に位置づけられている。この訳稿は、西洋英雄伝記という内容からしても、戊辰戦争が始まる幕末期の切羽詰まった時期の翻訳とは考えにくく、江戸遊学から帰藩謹慎して間もない失意の時期の翻訳成果と考えられる。

(39) 「馬基頓二英主伝」、同上『求志洞遺稿』所収「文」の部二十三丁裏。原漢文は次の通りである。

「^{マセドニ-}馬基頓王^{ヒリツプス}非立^{アミンダス}第二者。明大^{マセドニ-}之子也。馬基頓^{ギリシヤ}為希臘十二国之一。始雖有王微弱不競。自紀元五百十三年。至四百七十九年。為^{ベルシヤ}波斯藩屬。後亦猶不得自主。及^{ヒリツプス}非立出。而国始興矣。非立為人。深沈果敢。有權略。其猶少也。国嗣不定。^{こうそう}詬争紛然。^{テベベロビダス}地品彼罷比大來為判決。遂拉非立歸。以為^{しち}質。養之^{エバミノングス}埃巴米嫩大家。埃巴米嫩大精於兵者也。非立因學焉。發憤鑽研。窮其^{らんおう}蘊奧。才智大進。其異日能拯^{すく}本国之衰替。雄視於一方。而以開嗣子之大業者。盖根於此云。」

(40) 「馬基頓二英主伝」、同上『求志洞遺稿』所収「文」の部、二十四丁裏。原漢文は次の通りである。

「非立舉事。不欲速成。必審始終之利否。以制緩急疾舒之宜。故前後大小數十戰。除^{ベルモテユスビサンチユム}彼爾摩都斯庇散多慕二役外。未嘗取敗。業殆將成。而一旦遭弒。其志不遂衆惜焉。子亜勒散得立。亜勒散得者。以三百五十六年。生以^{ベルラ}彼爾拉。天資卓犖。自幼負大志。父非立嘗與戰敵勝。王聞而泣。人以為問焉。則曰。大人奪我功名之地。是以泣爾。非立因知其為非常器。使亜理斯多的力斯為之傳。亜理斯多的力斯者。博物君子也。獎掖訓誨。尽其心力。王漸長。才兼文武。雄略絕人。非立弒遭弒、王乃繼位。時年二十一歲也。」

(41) 増訂版『象山全集』第二卷(信濃教育会編、1934年)所収「象山詩鈔卷之下」39-40頁。

「^{ナポレオン}題那波利翁像

何国何代無英雄。平生欽慕那波翁。邇來杜門讀遺伝。忽忽不知年歲窮。撫劍仰天空慨憤。世人那得察吾衷。如今辺警日復月。戰船來去海西東。外蕃學芸老且巧。我獨遊戲等孩童。守株未知師他長。矮舟誰能操元戎。嗟君原是一書生。苦學遂能長明聰。一朝照破當時弊。革弊除害民情從。旌旗所向如靡草。威信普加歐羅中。元主西征不足道。

豊公北伐何得同。人生得意多失意。大雪翻手朔北風。帝王事業雖未終。収為将宥有庸。世人心竅小於豆。齷齪寧知英雄胸。自奮能成遠大計。自屈難樹廊清成。安得起君九原下。同謀戮力驅奸兇。終卷五洲歸皇朝。皇朝永為五洲宗。」

- (42) 「馬基頓二英主伝」、前掲『求志洞遺稿』所収「文」の部、二十七丁裏。原漢文は次の通りである。

「論曰。亜勒散得英才大略。固過絶千古矣。然非有非立為之前。其成功之速。惡能如此哉。伝曰。創業垂統。非立有焉。使亜勒散得獲竟其志。則囊括三洲之地。以定一大統之勢。吾見其非難也。然而天弗借之年。偉業中廢。可勝惜乎。余幼時読国史。每觀織田右府。削平之功垂成。而俄斃於逆豎。未嘗不掩卷而泣。今於亜勒散得之事亦然。」

- (43) 「民間禁令序」、同上『求志洞遺稿』所収「文」の部、十四丁裏。原漢文は「而刑者也。為懲夫民之不從教而入于惡者而設也」。

- (44) 「民間禁令序」、同上『求志洞遺稿』所収「文」の部、十五丁裏。原文は次の通りである。

「余聞西洋各国法律之書。至詳至悉。而非独彫刻頒布。又以為齊民必學之科。故齊民皆靡弗知法律之概。而訟獄自寡。其或有之。有司先審訊其情。然後判。曰汝所訟。不合律某條。故屬曲。汝所犯當律某條。故處以某刑。訟者犯者。皆無復所措辭。甘心罪服。(中略)方今国家之務。在於挾宇内之至善而定經邦之大典。則若西洋法律之書。於有志之士。為所宜參覈。固不待論也。但余疾益痼。神益耗。欲繙蟹文之籍而不可得。僅就一二邦人所訳者。窺其一斑爾。惡足以摘其要而述之哉。天下之大。固不乏傑俊之士。必當有能見其全豹訳而出之以補東方之所未備者矣。余則刮目以待。」

- (45) 虎三郎の漢詩「静夜の吟」、同上『求志洞遺稿』所収「詩 坤」の部、十三丁表一十三丁裏。

「晴夜の吟」の原文とその読み下し文は次の通りである。

天有万古月	天ニ万古ノ月アリ
我有万古心	我ニ万古ノ心アリ
清夜高楼上	清夜、高楼ニ上リ
憑欄聊開襟	欄ニヨリテ聊カ襟ヲ開ク
天上万古月	天上万古ノ月
照我万古心	我ガ万古ノ心ヲ照ラス